



水面の宴  
50.0 x 60.6 cm / 油彩、キャンバス / 2019



幽玄

50.0 x 60.6 cm / 油彩、キャンバス / 2019



悠久の刻  
50.0 x 60.6 cm / 油彩、キャンバス / 2019

# — 京都の庭園に端を発して、 幽玄空間を醸し出す —

京都には、多くの石庭や枯山水、坪庭などの庭園がある。それは、日本全国にある景勝、名園とは趣が異なる。区画整理された、風水に基づく街並みの京都……そこには、歴史的背景や日本

本のルーツが色濃く反映されている。京都の町家の玄関などにある「竹矢来」といわれる竹を曲げた囲いは、保守的な京都を印象づけるが、軒先の坪庭も含め、凛とした佇まいである。「そこには、凝縮された神秘的宇宙空間がある」と服部はいう。彼女は作家にも憧れていたようだ。そんな京都に魅せられた服部は、現在、東京在住。あまり京都に行けなくなったそうだが、20〜30代の頃は、当時住んでいた岐阜から京都まで車を飛ばし、足繁く通ったという。

彼女の油画は、庭園や清流、蓮や睡蓮などのモチーフを基に描いてはいるが、風景画や花などの静物画としての具象絵画ではない。あくまで心象風景画である。服部の作品は、企画展（国内、海外）やグループ展、個展で発表される。そ

れは、自作品として、制約がない自由奔放な作品であり、自己実現の媒体となる。すなわち、その自己表現はこの作家の意思なのだ。

一方で、経済活動を伴う、商業としての美術もある。それが、自由奔放な自作品と一致すれば、最高である。服部はそれが困難という状況下で、作品発表とは分けた描く仕事をした。創作ファッションアパレル会社（株三年坂）での手描き友禅である。ちりめんのワンピースやドレス、ブラウス等に手描きするもので、自身の名前や印を入れ、面相筆や隈取り筆で描くことは楽しかったという。自分の描いたドレスが、「銀座の展示会で全て売れたよ」と同社の社長に言われた時、服部は本当に嬉しかったそうだ。

その後、彼女は、油画の画商（有美鵬）で、売り絵（商業絵画）の仕事をする。はじめて油画自作品が収入になった。しかし、ここでは、自身の意向が叶う画は当然ながら描けない。なぜなら、一般的に売れる絵画、つまり、需